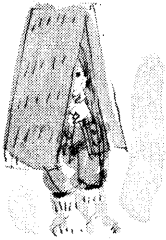


# 私の保育



山崎美知子

四季の移り変わりもわからない都会の生活から、今年の四月信州の郷里にもどり、自然の中での生活が始まりました。そして、市の北部、山の麓にある保育園で毎日子どもとびまわったり、砂遊び、虫集めと楽しく過ごしています。

こんな生活の中で、一学期も終わりのころ、今まで感じた事のない何かを、かすかに感じ始めたのです。

砂遊びを見ても、子どもたちは与えられた砂場というわくの中の遊びではなく、生活の場にある土に親しみ、土ののにおいの中で夢中で遊んでいます。

虫集めに興じ、草の根を分けてさがしまわり、コオロギやカマキリが草の中をとぶようになるとあき箱に穴をあけ、虫をさがして遊ぶのです。秋空にトンボがとび、子どもたちの生活は「虫と遊ぶ」という表現がびつたりです。

近くの社（やしろ）に行き、子どもの身の丈もある草むらで寝ころび、草のにおいをかぎながら、かくれんぼをしたりするもうをして遊ぶこともしばしばです。

大きな木を見上げ、「あれーめ」「あれはくち」などと怪獣や、おばけを想像し戦う子、こわごわ近づく子、その楽しいことといったらありません。

そしてまわりの木々が風に揺れるようすは、本当に何か話しかけているように見えるのです。

十月初め、四歳と五歳児で近くのどんぐり山にどんぐり拾いに行きました。途中、りんご園に寄って、おやつに大きなりんごをいただき、小さなカバンは満員になりました。細い道を一列になって歩いたり、石ころの坂道を一生懸命登りました。時々「せんせいまだ」「ぼくちょっとつかれちゃった」などという声も出ましたが、下り坂になると足どりも軽くとびながら降りてきました。

山の中の、小さな木の橋を渡った所がどんぐり山のふもとです。足もとの落葉の中にたくさんどんぐりがころがっています。

さっそくどんぐり拾いを始めました。食事もそこそこに山登りです。

一歩山に入ると道らしい道もなく、雨水の流れたあとをたどるような所です。落葉の上はすべりやすく、子どもたちは「キャッ キャッ」と喜び、木の枝や根につかまったり、「せんせいたすけて」とうれしそうに救いの手を求めたり、その緊張感は、声や手を握った時の強さで、私の体

にも伝わってくるのです。

交通事故をはじめとする、さまざまな危険から身を守らねばならぬ都会の子どもには、知ることのできない、自然の中での人間らしい緊張感ではないでしょうか。

山の上まで登った子どもは、もうすっかり自分がどんぐりや、まつぼっくりになったかのように、山をころがったり、すべったりしながら降りて来るのです。

この姿を見、子どもと一緒にこの緊張感を味わい、私の感じていた何かとは、本物の人間の生活がここにある”ということではないか……、と思ったのです。

今まで無我夢中で保育に取組んできましたがいつもいき詰まってしまう、何かすっきりしない状態に陥っていました。ここで本物の生活に触れ、目の前にあった大きな壁に小さな抜け道ができたような思いです。

この先何があるかわかりませんが、この生活の中で、子どもたちの心と体がおおらかに、たくましく育つことを信じたいと思うのです。

〈上田市芙蓉保育園〉